
実験の代償は...

黒助さん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

実験の代償は…

【Nコード】

N0369Z

【作者名】

黒助さん

【あらすじ】

これはロボットが普及し、人間と何の違いもない生活をしている、未来の話。とある男が、実験に実験を重ね、ついに念願の『結果』を得ることが出来た。しかし、実験には代償がつきものだ。彼が払った代償は…… 駄文ではありますが、見ていって下さると嬉しいですよ…。

（前書き）

駄文で申し訳ありません……。

うす暗い部屋にベッドが一つ、その上にはライトが設置されている。部屋の端には机があり、その上では様々な紙（いや、ここでは資料と言っべきだろう）が積み上げられ、そのうちの数枚は地面に落ちていた。それ以外に注目すべきものといえば、周りに人よりも大きいカプセルみたいな容器があるということだ。病院の手術室を連想させるようなその部屋に、一人、椅子に座りながらうずうずしている男が居た。

その男は、数ヶ月くらい、洗ったり、切ったりせずにいたようなボサボサとした髪で、体は痩せ細っており、目……いや、顔全体に生気が無い。しかし、それでもうずうずと何かを待ち望んでいるようだった。というのも、彼は将来を期待された学者、研究者にしか着脱衣の権利がない、白衣を纏った科学者であるからだ。彼は何かの研究をし、実験し、調べた『結果』を待ち望んでいるのだ。しかし、彼の目の前にあるのはベッドに横たわった一人の少女だ。……いや、良く見ると少女の姿をしたロボットのようなモノだった。機械の心臓の鼓動が、その男の心臓の鼓動とタイミングが一致するという、ありえないような偶然が起きた時、その機械少女は目を覚ました。目蓋を開け、カメラの仕組まれた眼球が露わになる。その瞬間、彼は今まで研究した日々を思い出し、目から頬を伝う心の汗を流した。

*

私の娘が死んだ。

いや、正確に言つと車に撥ねられ、その後死の淵を彷徨うという

最悪な『結果』が生まれたというべきか？まあいい。しかし、「そろそろ死にます」と医者ロボットが言っていたのを覚えている。だから、最初に言った通り、娘は死ぬことになるだろう。現実^{それ}は私を、私の精神を簡単^{コロコロ}に壊すような地獄だった。しかし、それは肉体的な損傷であり、それに加えて脳はまだ無事である。その事実が私にとつて、地獄に垂れる蜘蛛の糸のような救いだったが、それでも掴められるかもしれないという希望があった。

今の時代はロボットが普及され、ロボットが人間と同じように学んだり稼いだりが日常的だとされる時代である。これを利用する私の研究がここから始まったのだ。

まず、娘を私専用の研究施設へ持ち出し、脳^脳だけを取り出す。この時代はとてつもなく便利だ。脳だけを生かせるカプセルが研究所で開発され、研究によく使われているからだ。そのカプセルにゆつくりと脳を入れると、元々入っていた赤く透明な色の液体が少し跳ねる。これが脳を生かす液体だ。

その後、体をもう一つのカプセルに入れる。腐らせないためだ。娘の顔、髪、体、そのすべてを保存する。後にアンドロイドという人間に似たロボットを、娘の体の形にさせ、器^器を造るためだ。

ここまでくれば分かるだろう。そう、娘の脳を、ロボットに移植させることにより生きながらえるようにするためだ！

しかし、それには一つ、大きな問題があった。

それは、脳自体の移植という研究の『結果』が全て【DEAD】という悲しい過去があるため、打ち切りになったということである。実績のない移植はとても危険で、脳自体を傷つける危険性がある。だからこそ、私の大きな研究が開始されたというべきなのだろう。私は脳の移植を動物を使って開始した。

私の研究室の倉庫には役立たずのゴミ^{ロボット}共が腐るほどある。それを組み立てなおし、いろんな考察をし、実験動物の脳を移植させる。が、ことごとく失敗した。なにがいけなかったかこれまた考察し、予測し、資料にまとめる。その繰り返しだが娘のためになると信じ

て…。

動物を殺しに殺し、吐き、それでも研究を続けた。しかし、それも慣れてしまえば問題は無くなった。そして、こつとも思い始めた…実験【動物】だからダメなのでは、と。……そうして百余人もの子を殺した。ここ最近では孤児の子が多く、私はその子らを研究の実験材料として使わせてもらったのだ。嫌になつたさ。でも、娘がそれで生きれるならばと、私は子供たちの頭にメスを入れたのだ。

その中でも、娘と同じ歳の女の子を実験台に寝かせメスを入れる時、どれほど苦悩したことか。まるで娘を実験材料として使っているように思えて手が震えたのだ。それでも、本物の娘は後ろにあるカプセルの中にいる。娘を救いたければ更に研究に励むのだ。そう言い聞かせ、メスを入れた。

…気付いたら、この研究室は鉄の臭いと赤黒い壁と床で、空気も、霏困気も、服も、何もかも汚れてしまつていた。私の手さえも…。

だが、それも今日で終わりだ。

百余番の子の脳移植に成功したのだ。その資料を基に、私の娘をあの人間アンドロイドのようなロボットに移植させる。神経を繋ぎ合せ、手足を動かせるようにし、娘をアンドロイドに変える。それは少し辛いものがあるが、娘が生きるのならば…と、私は移植させた。

*

そして、彼は待ちに待った瞬間に歓喜し、感動した。頬を伝う涙はとめどなく流れ続け、手では拭いきれなかった。少女は目をあちこちへ移し、現状を把握しようとする。その時、ふつと眼に映つた男の姿に少女は、驚き、安心した。ああ、お父さんだ、と。

「お……父……さ……ん？」

か弱く、機械的ではない少女の声が、男の鼓膜に音の波となって響く。

「……っ！ ……ああ……お父さんだよ……？」

息を呑み、優しい顔で自分の娘に微笑んだ。その顔には、いつの間にか生気が戻り、父親の顔のそれになっていた。しかし、長いことこの研究室にいたせい、声がガラガラにもなっている。

「ふふ……お父さん、変な声」

そう言つて、少女も微笑み、少し笑った。男は少し戸惑いながらも、頬を人差し指で搔いて笑い、溜息を吐くように呟いた。

「え？ ……あはは、少し、頑張ったからね……。」

こうして、彼、織巻博士おりまきの研究の『結果』は成功したということだ。後の医学等に大きな影響を与えたのは、言うまでもない。

——その時だった。

一つの光が一瞬で動き、光の道を残しながらその男の腹へと消えたのだ。織巻博士は何事か分からず、その異変にただただ驚く。が、その顔が苦しくゆがんだ顔になると、腹を押さえ、床に倒れた。その光は光源ではなく、反射によるもので、それは織巻博士の腹に深々と、そして決るように突き刺さっていた。織巻博士は呼吸を必死でしつづ、それを刺した犯人を見る。その顔は、光で半分しか見れないが、光が見えない様な暗い目を見開き、口元は歪んで、笑っているように見える。彼女は、あの実験の最後の犠牲者だったのだ。博士は汗が一気に噴き出て、額に張り付いた髪の毛が邪魔で見えないが、それでも娘の顔を見たいと思い、目だけを動かす。そこにいたのは、とても美しく、愛しい愛しい、しかし、顔を歪めて泣く娘の姿だった。

とある町の大通りには、たくさんのロボットやアンドロイド、そして人が歩き、先を急いでいた。というのも、今は早朝の通勤ラッシュの時間帯であるからだ。そんな大通りには、大きなテレビで有名な通称テレビビルがある。そのニュースを見て行く学生やサラリーマンが多く、一応需要はあるビルだ。それにより、客足も手に入れている。しかし、そこではなくそのビルに映し出されたニュースに注目してもらいたい。見出しはこうである。

『おりまき 織巻博士、死亡』

内容は、

織巻氏は昨晚、自身の研究所前にて何者かにナイフで腹部を刺され、搬送先の病院で亡くなりました。えー、犯人は未だ見つからず、ロボ警察は警戒レベルを3に上げることになりました。しかし、警察の調べによると、研究所の中には夥しい数の死体が放置されており、織巻氏と関係があるとみて詳しい調査が行われています。というものだった。

結果を追い求め、殺人を犯したこの科学者の末路はたった一本のナイフにより殺されたのだった。果たして、これはハッピーエンドなのか、それとも、バッドエンドなのか。それを知るもの、考える者はいない。

（後書き）

誤字脱字誤文等の指摘も待っています。
読んで下さり、ありがとうございます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0369z/>

実験の代償は...

2011年12月2日15時53分発行